

Henri Leridon, translated by Judith F. Helzner,  
*Human Fertility: The Basic Components*, Chicago  
and London: The University of Chicago Press,  
1977, vi+202pp.

本書は、現在パリの国立人口研究所 (INED) 社会心理部長である Henri Leridon の著書 "Aspects biométriques de la fécondité humaine" (1973) を、著者自身が改訂増補を行ない、その監修のもとに Helzner が英訳したものである。

本書は、人口の出生力そのものを論ずるといふよりも、ヒトの再生産過程を基本的な要素に分けて数理化し、再びそれらを人口レベルの出生力にまで組み上げようとするものである。

それはいわゆる micro-demography と macro-demography の橋渡しを狙っているのであるが、著者によればそのような試みの意義は次の二点に見出される。第一は、出生力に影響を持つ諸要因を微視的な立場から合理的に位置づけしつつ、同時に人口レベルでの比較、評価を可能にするという点であり、第二は、ミクロレベルでのみ記述され得るような構成要因中の分布の効果を、マクロレベルで直接評価できるという点である。

前者についてももう少し付け加えると、1956年に、K. Davis and J. Blake が指摘したように、出生力に影響する要因は、それが社会経済的なものであれ、文化的なものであれ、例外なく生物学的な媒介変量 (intermediate fertility variables) を通して作用するのであるから、そうした諸要因の働きを評価する上で、この媒介部分の成り立ちを定式化しておくことが、最も効果的であり、重要な仕事になるということである。

本書ではこの立場から、特にヒト再生産の生理学的な過程を軸として、内容が展開されてゆく。

まず序文に続く始めの2章において、ヒトの再生産過程を数理的にとり扱う上で必要な生理学的事項と、人口レベルの一般的な出生力指標が概説されている。一見かけ離れた二つの知識が並列して述べられている点に、逆に著者の本書における意図が読み取れる。続く第3章から第6章まではこの本の核に相当し、受胎調節を行なわない状態での再生産過程の四つの構成要素が、それぞれの章で詳しく検討されている。すなわち、fecundability (受胎力) であり、intra-uterine mortality (胎児死亡)、non-susceptible period (受胎不能期間)、permanent sterility (永久不妊) である。各章とも、用語の定義に始まって、豊富なデータの紹介と共に明解な説明がなされている。特に fecundability における各種のレベル格差や分布を取り入れる手法、また intra-uterine mortality に関するライフテーブルによる分析手法の説明部分には、それぞれ力が注がれている。続く第7章では、マクロレベルの自然出生力に視点を移す。そしてこの章では、最終的には先の四つの構成要素から自然出生力モデルを組み上げている。第8章では、もうひとつの構成要素、受胎調節が論じられている。しかし、ページ数は僅かであり、調節効果 (effectiveness) の概念を紹介するに止まっている。この部分の説明を簡単に済ませたのは、この分野で紹介すべきことが少ないというわけではなくて、出生力研究の基礎として、先の自然出生力の構成要素の重要性をより浮き彫りにしたいという著者の意図の現れであろう。本論のしめくりとなる第9章では、これまでに考慮されたすべての要素を出生力指標に結びつける手段として、いくつかの理論モデルおよびシミュレーションモデルが概説されている。前者では、Henri, Sheps and Menken 後者では、Potter and Sakoda, Jacquard and Bodmer などの仕事が紹介されている。しかし、ここでもあまり深入りはしていない。

全般的に見ると、一貫した意図の下によく体系だっており、話の進め方も丁寧でわかりやすい。また、引用文献は分野別のリストになっていて実用的である。

本書で扱われている生理学的事項とは、実はごく基礎的な事柄に過ぎないのであるが、それでもそれに関して人口学的に有用なデータとなると、いたって不十分にしか存在しないということも、本書の重要な主張のひとつだったように思われる。

(金子 隆一)